

歌姫西瓦窯等出土の箋書き瓦

平城宮跡発掘調査部

歌姫西瓦窯・音如ヶ谷瓦窯・平城京左京三条二坊六坪（宮跡庭園）から出土した箋書き瓦の記載について、再検討した結果を報告する。歌姫西瓦窯・音如ヶ谷瓦窯から箋書き瓦が出土したことは、既に報告があり（奈良県教育委員会・京都府教育委員会『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1973、pp.8・9、『同-III』1979、pp.25・26）、その後平城京左京三条二坊六坪（宮跡庭園）で出土した同様の箋書き瓦と比較検討を行った結果（奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986。以下、『宮跡庭園報告』と略称。pp.60・61）、宮跡庭園の箋書き瓦が歌姫西瓦窯から供給されたことが明らかになっている。今回これら3カ所の遺跡から出土した箋書き瓦の記載を再検討し、これらの箋書きが同種のものであることを、記載内容・字画や字体・筆順・記載位置などの特徴の一一致から確認した。

初めに、箋書きの種類と点数を遺跡ごとに整理すると、表のようになる（数字は既報告のものと若干変動がある）。歌姫西瓦窯が720～730年代の操業であるのに対し、音如ヶ谷瓦窯の成立は745年の平城遷都以降に下り、両瓦窯の操業時期は連続しない。しかし、両瓦窯は谷を隔てて100mの至近距離に接する関係の深い遺跡で、音如ヶ谷瓦窯出土の軒瓦のうち歌姫西瓦窯と共に書かれるものは、歌姫西瓦窯産であることが判明している（『奈良山-III』p.32）から、今回紹介する音如ヶ谷瓦窯出土の箋書き瓦も、筆跡の共通するものは歌姫西瓦窯産の可能性が考えられる。従って、表に示した両瓦窯の箋書きの種類の比率の違いにいかなる意味を読みとるかは、瓦そのものの分析をまって改めて検討する必要がある。

次に、箋書きの種類ごとにその概略を述べる。箋書きは特記した以外全て平瓦凹面に施されている。
大 広端を上にして左端（広端寄り、中央、狭端寄りの各事例がほぼ均等にある）に書かれる。字画は細いものが多い。筆順は横画、左払い、右払いの順。字体の崩れたものが多く、第一画を極端に右上がりにするものや、第三画を第一画と第二画の交点から離すものが多い。大きさは2cm程度から5cm程度まで大小がある。なお、歌姫西瓦窯出土のものに、丸瓦凹面の例がある。

夫 広端を上にして左端の狭端寄りに書かれる。字画は細いものと、後述の歌姫西瓦窯の「夫」に通じる太いものとがある。筆順は漢字の「夫」と同じで、横二画、左払い、右払いの順。第一・二画を狭い間隔で真横に平行に書く。漢字ではなく「夫」の横画を一画省いた記号か。

夫 記載位置は「大」と同じ。字画は細い。筆順は横三画、左払い、右払いの順。第一画から第三画までを狭い間隔で平行に書く。宮跡庭園出土の1点は平瓦凸面に書かれており、字画が太く横画相互の間隔が広くかつ短いなど、やや異質である。なお、「夫」は平城宮・京出土の墨書土器にも類例が2点ある（平城宮SD2700出土の1点－奈文研『平城宮出土墨書土器集成 I』1983、第156号。平城京右京八条一坊のSD920出土の1点－玉田芳英「漆付着土器の研究」奈文研『文化財論叢II』1995、pp.341～343）。「夫」は「夷」の異体字であり（佐伯有清「刻字土器「夫」の意義」北海道大学埋蔵文化財調査室『サクシュコトニ川遺跡』1986）、また東北・北海道地方の七カ所の遺跡から「夫」の刻書のある土器や瓦が出土してい

	大	夫	夫	泰	キ	X	七	+	不明	計
歌姫西瓦窯	40 33.1%	11 9.1%	3(1) 3.3%	1 0.8%	7(1) 6.6%	2 1.7%	17(13) 24.8%	7(1) 6.6%	17 14.0%	121
音如ヶ谷瓦窯	7 18.9%	2 5.4%	(2) 5.4%				13(6) 51.4%	4 10.8%	3 8.1%	37
宮跡庭園	1 5.0%		1 5.0%		10(4) 70.0%		(1) 5.0%	(3) 15.0%		20

箋書き瓦出土点数一覧

※・()内は疑問の残るもの。但し比率はこれを含めて算出した。

・「不明」にはいずれか断定困難なものを含む。

る（「夫」の事例とその意義については、小口雅史「夫」字
箋（墨）書について』『海峡をつなぐ日本史』1993、参照）。

秦 記載位置は不明。字画は細い。第五画までは
「夫」に酷似する。

七 広端を上にして右端の広端寄りに書かれたもの
が多い。字画は太いが「キ」よりは細い。10cm
四方程度の大振りのものと、5cm程度の小振りの
ものがある。いずれも筆順は横画、縦画の順であるが、
縦画を曲げる時に二画に分け三画で書く場合
もある。第一画と第二画はそれぞれの字画の中央
で交わり、漢字の「十」の一端にカギを付けた
ような字体をとるので、漢字の「七」よりはむし
ろ記号に近い。

十 記載位置は一定しない。字画は細く深く、3
cm四方程度の小振りに書かれる。45°回転させて
「X」とするものがあり、漢字の「十」ではなく
記号であろう。なお、宮跡庭園出土の2点はい
ずれも丸瓦凹面の例で、「大」の可能性も捨てき
れない。歌姫西瓦窯には平瓦凸面狭端の例がある。
10cm程度の大振りな漢字の「十」のように読みと
れる事例が多数あるが、これらは字画が太く、また
周囲が欠損しており確実に「十」と判断できる
事例ではなく、「七」の断片の可能性が高い。

キ 広端を上にして広端中央に書くものが多い。
字画は太く深く、幅5mmに及ぶものもある。筆順
は、横二画、縦画の順で、両画は直交する。音如
ヶ谷瓦窯には、90°回転して書く例がある。

× 記載位置は不明。字画は細いもの太いもの
がある。筆順は、横画、左払い、右払いの順。

以上のうち、「大」「夫」「夫」「秦」は、字体や記載
位置の類似からみて、「秦」→「夫」→「夫」→「大」
という関係が想定され、関連する箋書きとみられる。
すなわち「夫」は「秦」から「禾」を除いて
作られた記号であろう。「夫」から一画省いたもの
が「夫」、さらに一画省いたものが「大」であり、
これらは漢字としてではなく記号として用いられ
たと考えられる。従って、歌姫西瓦窯・音如ヶ谷
瓦窯の「夫」は夷の異体字ではなく、東北・北海
道地方で出土する「夫」とは異質とみるべきであ
ろう。

（渡辺晃宏）

音如ヶ谷「大」 宮跡庭園「大」 歌姫西「大」

音如ヶ谷「夫」 歌姫西「夫」 歌姫西「夫」

宮跡庭園「夫」 音如ヶ谷「夫」 カ 音如ヶ谷「夫」 カ

歌姫西「夫」 歌姫西「夫」 歌姫西「秦」

歌姫西「夫」 歌姫西「夫」 カ 歌姫西「X」

歌姫西「七」 歌姫西「+」 歌姫西「キ」

音如ヶ谷「七」 音如ヶ谷「+」 宮跡庭園「キ」

箋書き瓦（部分） ×0.4（「七」の2点のみ×0.3）